

公募意見 反映見えず

新国立計画決定

七月の白紙撤回から五カ月。新国立競技場の新たなプランが決まり、建設計画がようやく動きだした。旧計画では、日本スポーツ振興センター（JSC）や文部科学省の情報公開の不十分さ、選考過程の不透明さが批判された。今回は改善されたのか。

（上田千秋、大平樹）

2案のみ 選択肢少なくて

■専門家7人審査

「国民とプロセスを共有しなかった」。A、B両案を採点したJSC技術審査委員会の委員長で東京大名誉教授、村上周二氏は二十一日の記者会見で、両案を事前公表した上で採点した

旧計画	新旧計画の進め方の主な相違点	新計画
<ul style="list-style-type: none"> 文部科学省とJSCの集団指導体制で、責任の所在があいまい 有識者会議に建築の専門家は1人だけ 担当理事や設置本部長に権限がなく、プロジェクトマネジャーが不在 情報公開が不十分で、選考過程が不透明 	<ul style="list-style-type: none"> 首相官邸が主導し、実動部隊は国土交通省や財務省などの職員 建築の専門家ら7人でつくる技術審査委員会を設置 文科省出身の担当理事をプロジェクトマネジャーに任命 広報体制を拡充させ、情報発信を強化 	

旧計画と旧国立競技場の概要



旧計画	旧国立競技場
工 費 2651億円	建築面積 3万3716平方メートル
工 期 2019年5月	高 さ 30メートル（照明を含めると57メートル）
建築面積 7万8110平方メートル	階 数 地上5階
高 さ 70メートル	収容人数 5万4000人
階 数 地上6階地下2階	車いす席 40席
収容人数 8万人	
車いす席 146~406席	

意義を強調した。安倍晋三首相も同日の閣僚会議で「選定が適切になされたものであることを点検した」と話し、JSCの採用過程は適正だったと自信を見せた。

旧計画では、事業主体のJSCと監督官庁の文科省に厳しい批判が集まった。文科省の第三者委員会は九月、国民に情報が開示されなかった点を問題視。第三者委員の報告書では「積極的な情報発信を行っていた形跡は見られない」「丁寧な説明がされることなく、国民に不信感を抱かせた」と

A案とB案の評価

	配点	A案	B案
業務の実施方針	140	112	104
事業費の縮減	210	31	28
工期短縮	210	177	150
維持管理費抑制	70	44	50
ユニバーサルデザイン	70	48	53
日本らしさへの配慮	70	50	52
環境計画	70	54	50
構造計画	70	52	55
建築計画	70	42	60
計	980点	610	602

※配点は、各審査委員の持ち点10×30点×7人

核心

指摘した。

新計画では情報発信は前进了たものの、国民の意見がどう反映されたかが見えない点は、旧計画と同じだ。JSCはインターネットでの国民の意見を募集し、二十一日午後五時段階で千七百七件の意見が寄せられていた。しかし、採点した審査委員は建築の専門家ら7人だけで、その採点結果が決定に直結した。

スポーツライターの杉山茂樹氏は「スポーツに関心のない人や建築に詳しくない人は大勢いる。そういう人たちにも分かりやすいプロセスだったと言えるのか。国民にとって受け身のまま決まってしまう」と

残念がる。

■施工と一体発注

別の問題を指摘する声もある。

今回は五輪までのスケジュールが厳しく、工期を短縮するため設計・施工を一体で発注する「デザインビルド方式」が採用され、大規模な工事ができる大手セネコンと組むことが不可欠となった。関係者によると、この方式が採用されたことで応募をあきらめた建築家は少なくなかった。

旧計画のデザインコンクールに参加した建築家の遠藤秀平・神戸大教授は「限られたメンバーしか参加できなかった。もっと応募者がいれば選択肢が広がり、より広く意見が交わされたはずだ」と、二案しか応募がなかったこと自体を問題視する。

設計・施工業者は決まったが、基本設計が始まるのは来年二月。首工は来年十二月になる。JSCはホームページで意見の募集を続けており、国民の声を反映させる余地がないわけではない。

杉山氏は「関係者だけで進めるのではなく、わくわく感や喜びが感じられるようなアイデアを打ち出し、未永く誰もが楽しめる空間をつくらなければならない」と、今後も幅広い意見を反映させるべきだと注文を付けた。